

### (3) 歴史的環境

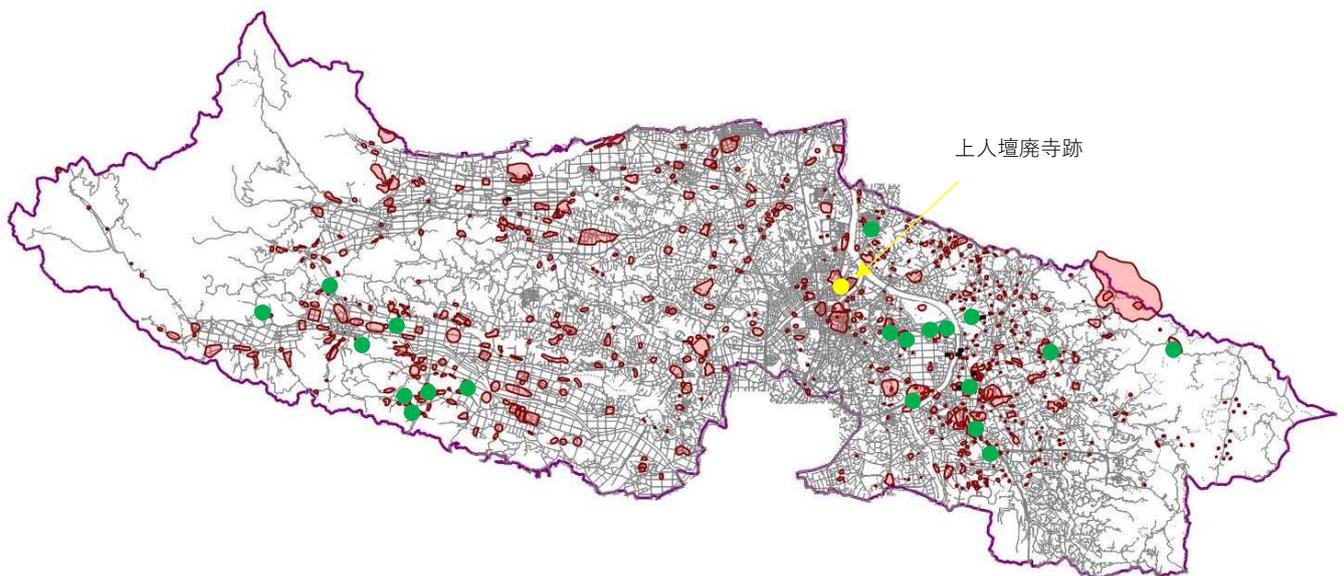
市内では 818 カ所（令和 4 年現在）の周知の埋蔵文化財が確認されており、分布状況は県内でも有数の密度です。開発に伴い発見される遺跡もさらに増加することが考えられます。

本市の遺跡分布は、阿武隈川の支流である釈迦堂川や江花川・滑川流域を岩瀬郡西部、上人壇廃寺跡を含めた旧須賀川市域を中央部、さらに阿武隈川東側を岩瀬郡東部としておおむね 3 つに区分できます。旧長沼町や旧岩瀬村、さらに天栄村を含む岩瀬郡西部は、中通り地方と会津地方の接点であり、生活文化や出土遺物に会津地方との共通点や影響が多くみられます。一方、岩瀬郡東部には浜通り地方や茨城県へと至る街道が通り、これらの地域との交流が遺跡からうかがえます。上人壇廃寺跡の位置する岩瀬郡中央部はこれらの中間に位置し、古代における東山道、近世における奥州街道といった幹線道路を通る地域であることから、地方行政や経済の中核的な性格をもつ遺跡が分布しています。

#### ① 寺院成立以前の様相（旧石器時代～古墳時代）

旧石器時代から縄文時代にかけての遺跡は市の西部と東部の丘陵地帯を中心に分布しており、上人壇廃寺跡が位置する市の中央部においてはほとんど見られません。弥生時代後半から古墳時代初頭にかけて、阿武隈川流域に集落や古墳が認められるようになり、人々の生活の拠点が山間部から阿武隈川流域の平坦部へ移動していき、古墳時代の主要な古墳と集落は阿武隈川流域を中心に分布するようになります。

上人壇廃寺跡の位置する釈迦堂川沿いでも、旧石器時代から弥生時代にかけての遺跡はほとんどみられず、古墳時代後期の横穴墓群が営まれているものの、奈良時代以前の目立った集落は確認されていません。

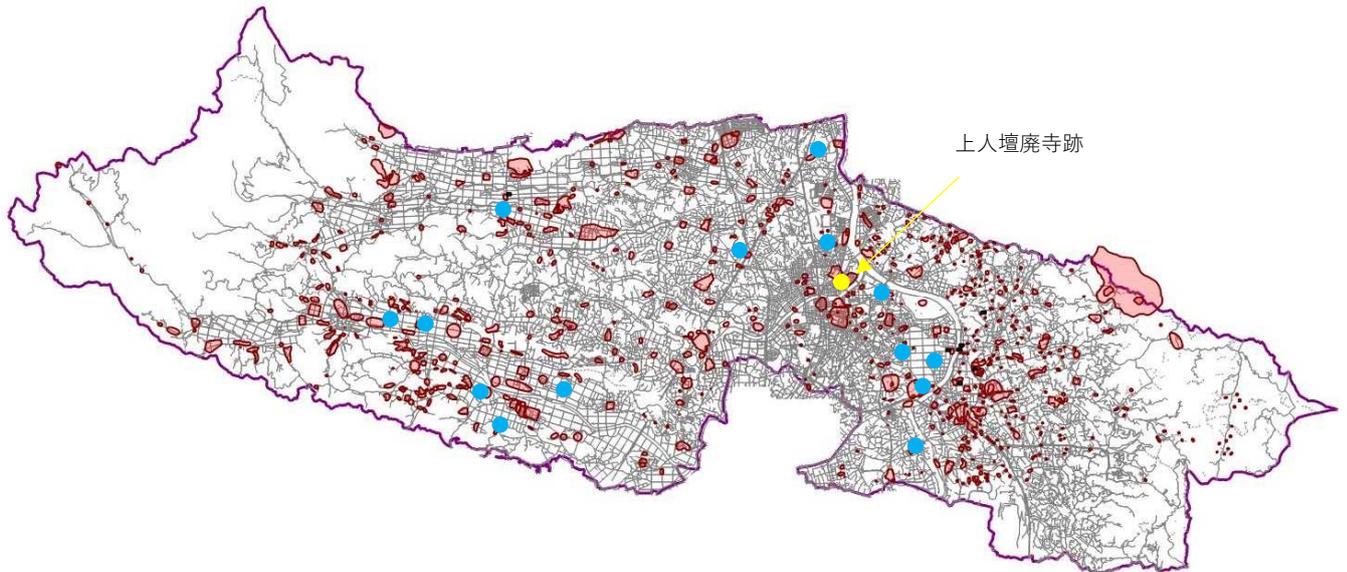


第 28 図 寺院成立以前（旧石器時代から古墳時代）の遺跡分布図

## ② 寺院成立直前の状況（7世紀）

古墳時代から奈良時代への移行期となる7世紀は、中央集権的な政治機構の広がりに伴い、古墳築造が終息していくとともに石背郡の成立につながる動きが並行します。阿武隈川流域のほか、上人壇廃寺跡が位置する釈迦堂川・江花川・滑川水系にも古墳や群集墳、集落がみられ、人口も増加していることを示しています。

7世紀後半には、栄町遺跡で評衙（郡成立以前の行政単位である評の役所）の遺構が確認されています。有力な集落や古墳が阿武隈川沿いに集中する時代が終わり、上人壇廃寺跡が置かれる要因となった新しい行政の仕組みがこの地方に及んだことを示すものです。

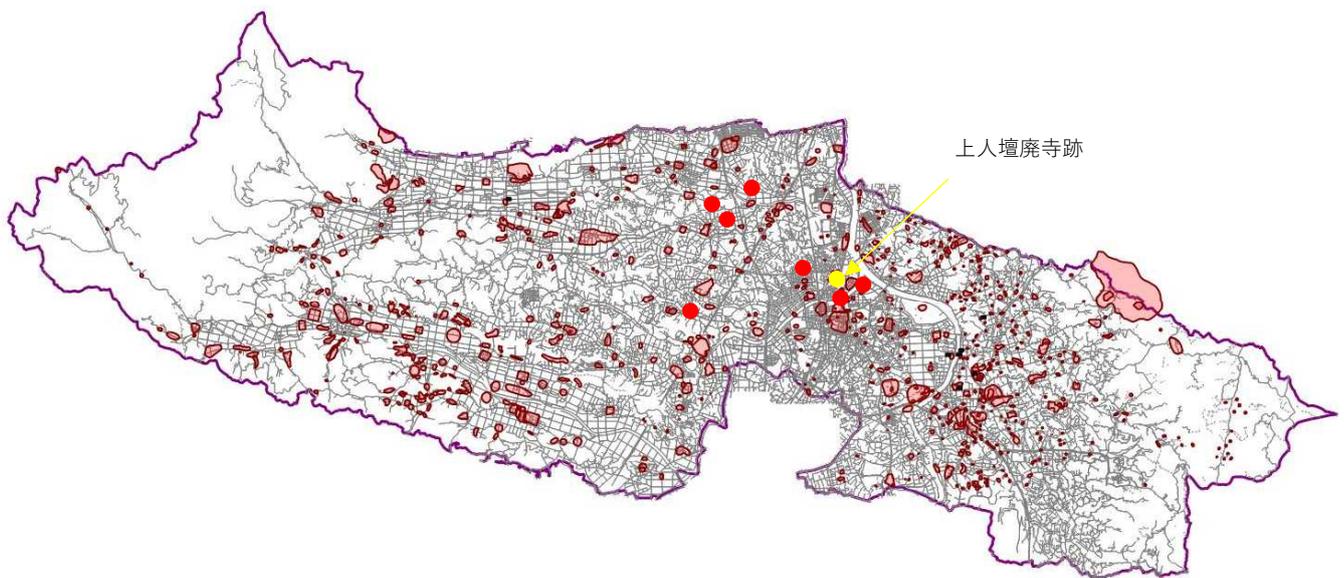


第29図 寺院成立直前（7世紀）の主要遺跡分布図

## ③ 寺院成立から廃絶までの様相（8世紀～10世紀）

律令体制下で官道の東山道が設置され、古墳時代に拡大した岩瀬郡西部などの集落を結ぶ河川として釈迦堂川が重要視された結果、阿武隈川沿岸から北西側への地域に集落が多く営まれました。石背郡衙としての栄町遺跡、官人層の集落と考えられるうまや遺跡と前後し、鎮護国家のための仏教施設として上人壇廃寺跡がおかれました。中央と地方を結ぶ幹線道路と行政機関が置かれ、岩瀬地方の都市としての原型はこの時期に整ったといえます。関東の影響を受けた土器の出土も多く、活発な人的・物的交流があり、これまで集落が少なかった東部や北部地域にも集落がみられるほか、東部で鍛冶関連遺物も多く出土します。

平安時代にも栄町遺跡と上人壇廃寺跡は機能していますが、上人壇廃寺跡から西へ700mの位置に9世紀を中心とする遺物と遺構が確認されている米山寺跡があります。郡衙との関係が深かったと考えられる上人壇廃寺跡とは異なり、地方豪族が設けた氏寺的な性格が想定され、地方への仏教文化の浸透過程を示すものとしても重要な遺跡です。



第 30 図 寺院存続期の主要遺跡分布図

#### ④ 寺院廃絶以降の様相（11 世紀以降）

うまや遺跡は 9 世紀に急激に規模を縮小し、栄町遺跡と上人壇廃寺跡はともに 10 世紀に廃絶しますが、米山寺の背後にある丘陵には米山寺経塚（山寺地区）が営まれ、承安元(1171)年の年号を有する陶製の経筒外容器や銅製の経筒などが出土しています。天王寺経塚（福島市）・平澤寺経塚（桑折町）でも同じ施主の経塚があり、平安末期における仏教文化の在り方を考える上で貴重な資料です。

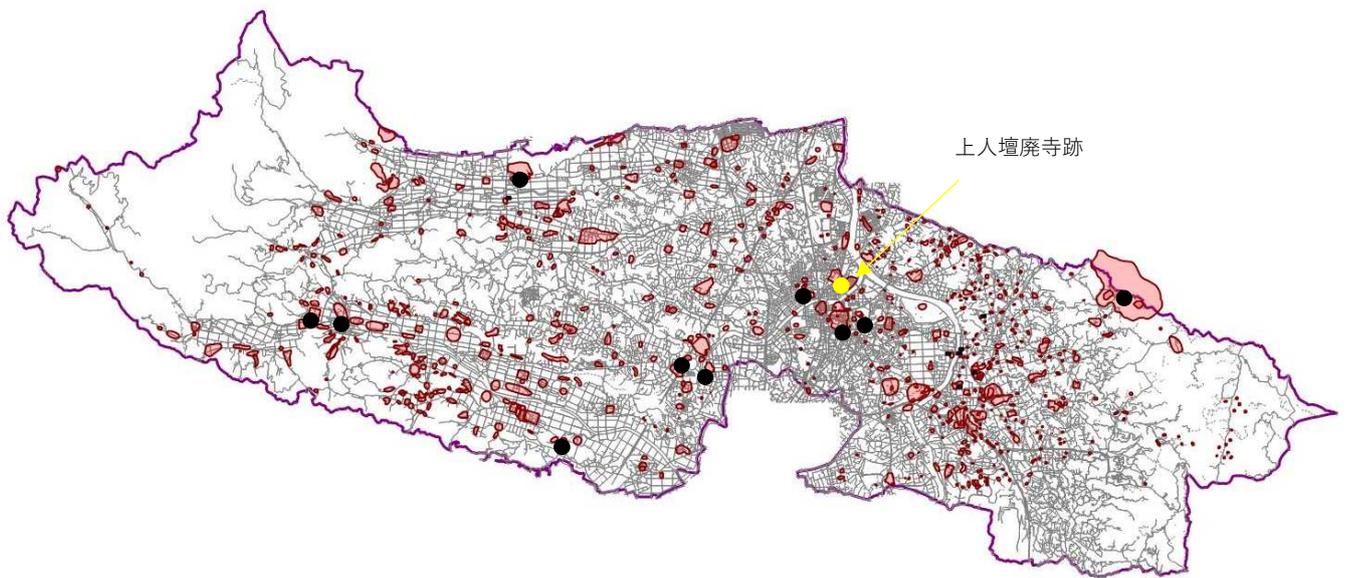
鎌倉時代になると、二階堂氏が岩瀬郡を領有します。この時代の遺跡に関する情報が少なく、不明な点が多くありますが、うまや遺跡ではかわらけと呼ばれる素焼きの土器や中国産の陶磁器が出土しています。

南北朝時代には、東部に南朝、西部に北朝の拠点がそれぞれ置かれました。室町時代初頭には、室町時代の統治機関である鎌倉府から派遣された足利満貞が東北地方支配の拠点を西部の稲地区に置いています。

戦国時代の遺跡としては、市全域に城跡が多く見られます。特に、須賀川城は天正 15(1589)年に伊達政宗との戦いによって廃絶しました。また、豊臣秀吉は奥州仕置の際、長沼城に宿泊したのち伊達政宗のいる会津若松城（黒川城）に向かいました。

江戸時代は、須賀川城の堀を埋めて作られた町の中心を奥州街道が通り、須賀川は宿場町として栄えました。中心市街地は白河藩領ですが、上人壇廃寺跡の位置する中宿は、江戸時代は越後高田藩領の一部となります。

明治 9(1876)年に本町・中町・北町・道場町が合併し、須賀川村となります。その後森宿村の一部を合併し須賀川町となり、昭和 29(1954)年に浜田村、西袋村、稲田村、小塩江村の 4 村が合併して須賀川市が誕生し、さらに昭和 30(1955)年に仁井田村、昭和 42(1967)年に当時は石川郡に属していた大東村、平成 17(2005)年に長沼町及び岩瀬村が合併し、現在の須賀川市となりました。



第 31 図 寺院廃絶後の主要遺跡分布図

#### ⑤ 上人壇廃寺跡の成立から廃絶期の状況

奈良時代の集落や、上人壇廃寺跡、石背郡衙としての栄町遺跡、官人集落としてのうまや遺跡、在地豪族の氏寺的な性格を有する米山寺跡といった拠点的な施設は、前代の古墳時代の古墳や集落が集中した阿武隈川沿岸ではなく、その北西におかれています。これは、律令体制下で官道の東山道が設置されたことや、古墳時代に拡大した岩瀬郡西部などの集落を結ぶ河川として釈迦堂川が重要視された結果と考えられます。このほか、阿武隈川南岸や釈迦堂川東岸には要害遺跡（中宿地区）や仲の町遺跡（仲の町地区）などがあります。

新しい支配体制・行政組織の成立をうかがわせるものとして、正倉院宝物に類似する大刀を副葬し、郡司クラスの人物の墳墓と考えられる稲古館古墳（稲地区）があります。梅田横穴墓（西袋地区）や一斗内古墳（越久地区）なども、阿武隈川ではなく、古墳時代後期の古墳や集落が希薄で前代からの継続性がみられない釈迦堂川や滑川沿いに築かれていることが特徴です。

平安時代の集落は、特に9世紀から10世紀代にかけて書かれた『和名類聚抄』に記載されている郷単位で、掘立柱建物を中心とする官衙に類似する施設が各地で見られるようになります。

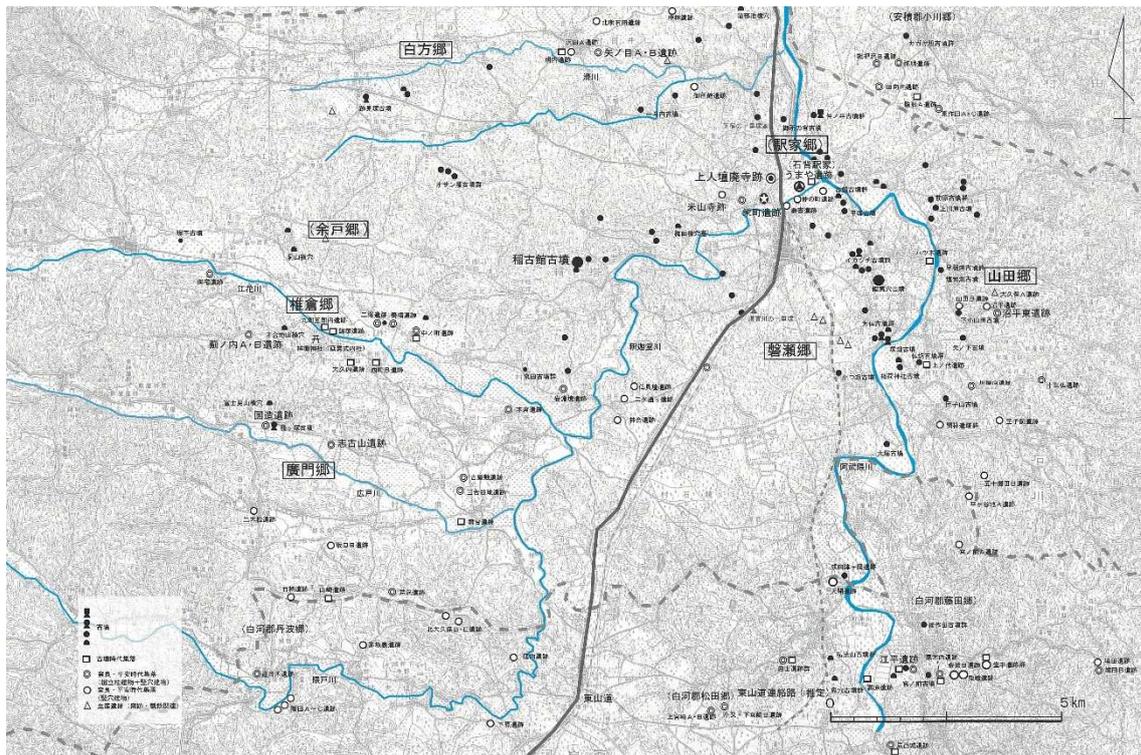
『和名類聚抄』はいくつかの写本が伝わっていますが、このうち名古屋市博本には、現在の岩瀬郡の郷名として「磐瀬・椎倉（高山寺本では「惟倉」、元和本で「推会」と記載）・廣門・山田・余戸・白方」の6郷を挙げています。磐瀬郷は岩瀬郡中央、山田郷が岩瀬郡東部、白方・余戸郷が岩瀬郡北部、椎倉・廣門郷が岩瀬郡西部に相当すると考えられています。

岩瀬郡北部の白方郷では矢ノ目 A 遺跡（仁井田地区）、岩瀬郡東部の山田郷では沼平東遺跡（小倉地区）、岩瀬郡西部の椎倉郷は薊ノ内 A・B 遺跡（梓衝地区）、廣門郷は志古山遺跡（岩瀬郡天栄村）がその代表で、これら遺跡の周辺に竪穴建物を主とする集落が点在しています。また、岩瀬郡東部の平ヶ谷地遺跡（狸森地区）など標高 350m の山間地に小規模な集落がつくられるようになります。奈良時代の山間開発が継続したもののですが、より広範囲に拡散していく傾向がみられます。手工業関係の遺構は岩瀬郡東部の関林 D 遺跡（田中地区）

で、鉄製品の生産工房、岩瀬郡北部の矢ノ目 A 遺跡では、土器工房や鉄製品の生産工房跡があります。特に岩瀬郡北部は、関下窯跡に代表される須恵器窯が多く、良質な粘土産出を背景に大甕などを各集落へ供給していました。

一方、郡衙などのある中央部は、上人壇廃寺跡や栄町遺跡など丘陵地・台地上の遺跡は存続しますが、うまや遺跡は平安時代に入ると急激に集落が縮小し、拠点域が周辺に移動します。

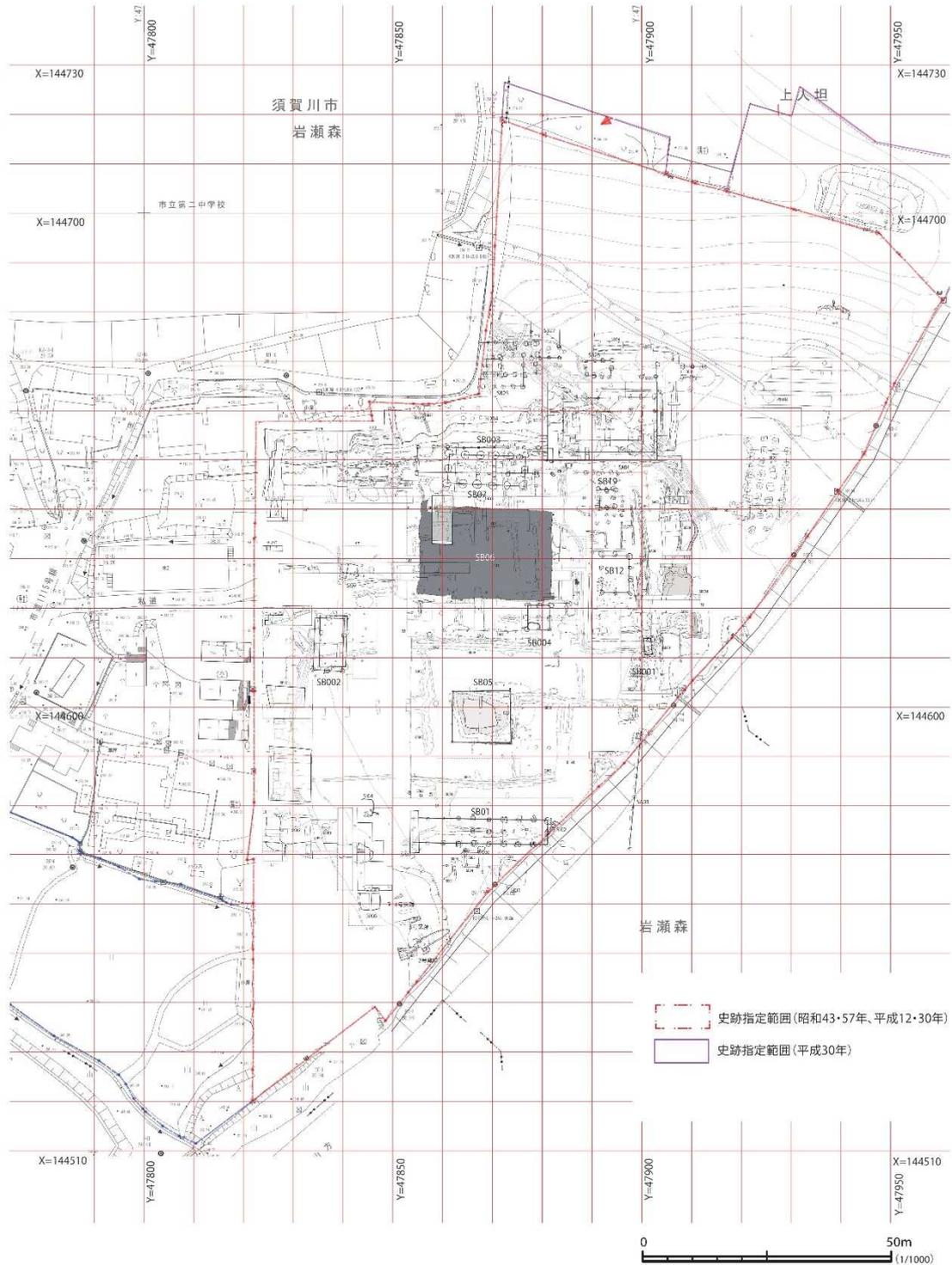
郡衙としての栄町遺跡は 10 世紀中葉、上人壇廃寺跡も 10 世紀前半に廃絶します。竪穴建物の終末は関林 D 遺跡 6 号住居（田中地区）の 10 世紀末で、丘陵上に 1・2 軒と小規模な集落が多く形成されています。11・12 世紀はさらに不明瞭で、散発的に土器が出土するのみとなります。



第 32 図 上人壇廃寺跡成立から廃絶期にかけての主要な遺跡

#### (4) 上人壇廃寺跡の遺構

上人壇廃寺跡ではこれまでの調査で掘立柱建物跡 20 棟、柱列・柵列跡 10 基、区画溝などの溝跡 42 条、竪穴建物跡 7 軒、窯跡 4 基、土坑 23 基をはじめ、築地遺構・暗渠遺構・幢幡遺構・井戸跡が各 1 期確認されています。出土遺物や重複関係から 8 世紀末～10 世紀末までに 4 期の変遷が確認できます。

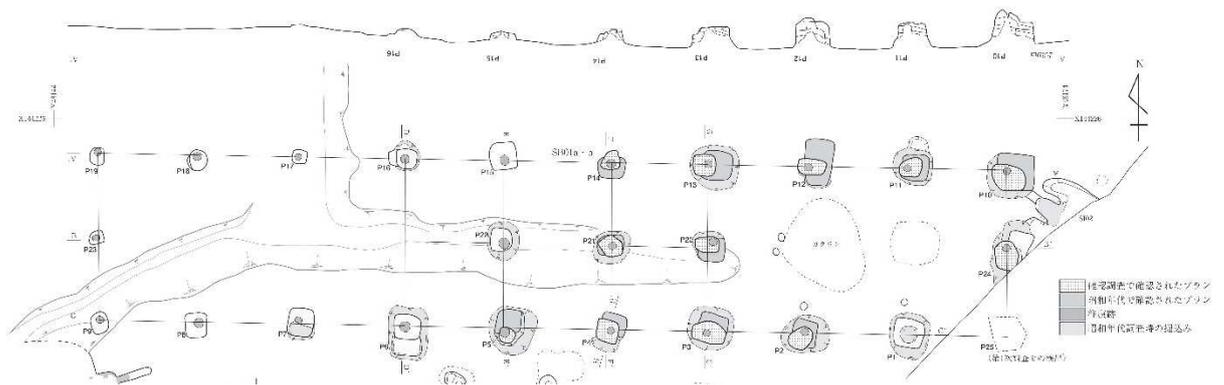


第 33 図 上人壇廃寺跡 遺構配置図

■ 主要な遺構

【SB01：南門跡】

東西9間(27m)・南北2間(5.1m)、基壇痕跡のない掘立柱建物跡です。中央部の2×3間が八脚門となり、その東西両側に2×3間の建物がとりつきます。柱間隔は桁行2.9mが基本ですが、八脚門部分は20~30cm広くなります。梁行の南側は2.54m、北側が2.53mとなっています。柱痕跡は直径約20cmを図ります。屋根形式は、桁行と梁行の柱間の差から中央・両脇部分ともに切妻造りと考えられます。中央と両脇の屋根の切り違いについては不明です。



第34図 SB01(南門跡)

【SB05：基壇建物（金堂）跡】

史跡中央部にある約7×8mの土壇で、建物の基壇と考えられます。現在地表面に表れている唯一の遺構です。基壇の平面形と規模は、版築の周辺に確認された堰板溝の範囲から桁行11.8m、梁行10.3m、1尺を0.297mとした場合40尺×35尺の長方形となります。版築基壇の遺存高は0.7mで、礎石据え付け痕跡がないため、礎石は0.8m以上の高さに存在したと想定し、かつ礎石の高さを40cmとすると、基壇の高さは120cm程度と考えられます。これらのことから、40尺×35尺四方、高さ120cm程度で階段を有する木装の基壇であったと考えられます。この形式や平面規模は海龍王寺西金堂（奈良県奈良市）との類似が指摘されています。



金堂（SB05 基壇建物跡） 全景（上が北）



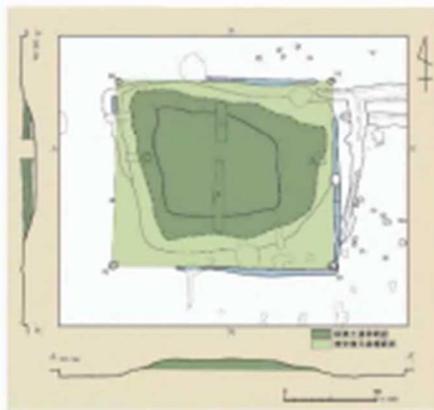
金堂（SB05 基壇建物跡） 検出状況（南より）



金堂（SB05 基壇建物跡） 南東側（南より）



金堂（SB05 基壇建物跡） 南東側版築状況（南東より）



金堂（SB05 基壇建物跡） 平面図・断面図



（参考）海龍王寺西金堂

第35図 SB05（金堂跡）